

教育を 読む

河合文化教育研究所
主任研究員 丹羽健夫

著者は「仕事をしないでも暮せる身分になれるまでにはまだ遠いから・・・一日でも、一週間でも我々を兎に角、その間だけ解放してくれるのが旅行である」と書きはじめる。『金沢、又』の項ではこつ酒について語る。

「古九谷の見事な大皿に鯛が反り返り、それを浸す酒がこつ酒にしかない光沢を帯びる時、何か海を飲む思いをする。・・・酔をすすむるさかづきは、寒月袖にしづかなり。・・・」

『或る田舎町の魅力』では名所旧跡など何もない町を探す。そして見つけたのが八高線（八王子－高崎）の児玉であった。著者は菊正の瓶詰め一本と毛抜き鮎一箱を持って汽車に乗る。汽車はコップを肘掛けに置いても転げ落ちる心配がないほど、ゆっくり進む。児玉の宿では三階の眺めのいい部屋に通される。目の前に百年は経たであろう銀杏が聳え、その向こうに上質の瓦屋根の家並みが続き、遠くから豆腐屋の喇叭が聞

こえてくる。この宿で千歳誉という旨い地元の酒を飲む。

『酔旅』は新潟・酒田行きの話である。文春クラブでシェリー酒を買った、新橋駅前の小川軒で酒の肴の折り詰めを仕入れて、上野から汽車に乗る。汽車が上州に入ると桜がまだ満開であった。曇天下の桜を眺めながら、シェリーを飲み、パンの切れ端にカニの脳ミソと内臓を固めたのを塗ったのなどを、つまみながら行く。

『旅と食べもの』は汽車と食べもの話。まず駅弁。

『汽車旅の酒』

吉田健一著 本体 800 円＋税



「駅で売っている弁当に三種類あって、その一つは、御飯とおかずと一緒に折に入っているもので最下級、それから御飯とおかずが別々の折に入っているのが二種類あり、折が長方形のと、四角いので、どうもこの四角い方が中身がいいようだった。」

そして食堂車。などなど汽車旅と弁当そして酒について語られる。

垂涎のつばを飲み込みながらお読みいただける快著である。

なお、著者は英文学者であり父君は吉田茂元首相である。